

# 「信州伝統大工コース」は何を目指すか？

修了生・講師・支援者の思い



大工の活躍の場をどう拡大するか。左から宮澤泰弘氏、高野実氏、岸豊氏、三浦保男氏、山田憲明氏、秋山恒夫氏

## パネルディスカッション 「信州伝統大工コースは何をめざすか」

司会：  
秋山恒夫氏  
(信州職人学校コーディネーター、職業能力開発総合大学校元教授)

パネリスト：  
山田憲明氏 (山田憲明構造設計事務所代表)  
岸 豊氏 (新建新聞社編集部記者)  
三浦保男氏 (三浦創建代表、信州職人学校・実技講師)  
高野 実氏 (信州伝統大工1級)  
宮澤泰弘氏 (信州伝統大工1級)

三浦 信州職人学校で学んだことをそのまま現場で生かせるのがベターだが、実際、なかなか難しい。学んだ知識・技能は必ず役に立つが、そうはいっても、

## 修了生たちのやった仕事が大勢の人に知れ渡ることが必要だ。

「クシヨップを行い、実際に「どういう木が使えるのか」とどのようにつくればいいのか」といったことを綿密に協議して設計する。場合によっては先行して木材を調達し、計画と並行してストック、乾燥を進める。

そんなしくみづくりを発注者がやってくれると非常にいい。

地域の木を使って建てるには、一定量の木材を一定期間に加工できる大工

が地元にいることに加え、コストが非常に重要となる。いまはプレカットにも複雑な加工ができる優秀な機械があり、コストも手刻みより安い。そうしたことをふまえ、素材生産から製材、乾燥の体制まで含めて考える必要がある。

まずは発注者を巻き込んで、地域材、地域の職人でつくることの意義を理解してもらい、位置付けをしっかりとさせてもらうことが急務。そして設計者も、プレカ

## 中学生のとき手伝いに行った大工の現場の印象が、すごくよかった。

長野県建設労働組合連合会(長野県松本市)は2月23日、長野県松本技術専門校で「信州伝統大工養成セミナー」伝統を未来につなぐ新時代の大工棟梁をめざして」を開催。信州職人学校の修了生ら約40人が参加した。

同連合会は2009年、伝統的な建築

「信州職人学校」で学ぶ意味、学んだ意味はどこにあるだろうか。

高野実 それまで、伝統的な継手・仕口による仕事をやってきたわけではない。その知識・実務を学びたいと思っていたところに、たまたま信州職人学校の募集を見つけて入校した。

自分の経験からだが、若手にぜひ、ここで学んで欲しいと思う。確かに、勉強したことが直接仕事につながらないかもしれない。が、同じ志の仲間がまわりにいることで、モチベーションは上がる。

私などもあまり手入れをしてこなかった道具を、研いだり、大事にするようになった。目に見えない進歩は必ずある。

宮澤泰弘 学び、資格を取って目指すところは、人それぞれだろう。

私はちょっと縁があった。寺の本堂をやってほしいという話を、いまいただいている。実際にやるのは何年後だが、そのとき一人では無理だ。が、信州職人学校でいっしょに学んだみんなで協力すれば、できるのではないだろうか。そのときはぜひ、声をかけさせてほしい。

そういう人たちがいるということ自体

が、ありがたいことだと思う。そうしたつながりを、地道につなげていけたらいい。

三浦保男 信州職人学校のような運動を、全国に広げて、もっと大きな潮流にしていきたい。

いまは、民家の再生などを手がけられない。伝統的な大工・職人の仕事に触れたり、実践したりする機会ほとんどない。現代の、いわゆる在来工法で建てている職人が大半だ。

そうしたなかで、信州職人学校は、伝統的な大工・職人の仕事の魅力をあらためて知り、理解を深めるきっかけになる。こういう活動があることを、もっと多くの職人に伝えていきたい。

しかし、若者がなかなか大工の世界に入ってこない。その現実をどうするか。

山田憲明 一つは、大工の手による魅力的な木造が地域に増えることが必要だ。

いま、熊本で2つの木造プロジェクトに関わっている。一つは庁舎、もう一つは学校。熊本は木材資源の多い県だが、自ずと製材を使って建築するしくみができているようだ。プロジェクトを単発のものとしてとらえるのではなく、地域の建築のトータルなしくみとして考えることが大事だと思う。

そのためには川上から川下までの連携が必要だが、たとえば建築計画の前にワ

ットしか経験したことのない人は、大工にやってみようこと自体を考えない。地元の大工でも十分できるんだということをも、広めていかなければならない。

岸豊 そうした取り組みをさらに裾野まで引き下ろし、小学生・中学生の子どもたちに木造のよさを伝えるといった活動もしてはどうか。

たとえば、長野県の本郷地域では、小学校の木造化を公共で進めていっている。ならば、そこに山田先生のような方にきていただいで、木造の魅力をよりかみ砕いて小学生に伝えていく。そんなこともやっていってはどうだろう。

高野 私も中学生のとき、大工の現場に手伝いに行つて、そのときの印象がすごくよかった。物心つかないときに「感じる」というのは、すごく大事なことだと思う。

——プロも含めて木造への理解が進んでいない、あるいは共有されていないなかで、大手や金融の主導で建築が進められてしまつ。これを切り崩し、知識・技能を習得した修了生に仕事があるような産業構造にしていかなければいけない。

我々は目の前の仕事をして食べていかなくてはならない。

そうして我々が1棟、2棟を建てている間に、ハウスメーカーの住宅が何10棟もできていく。現実には非常に厳しいが、しかし、いま技能継承をしていかないとあとながない。

技能の向上は重要なこと。信州職人学校の修了生がこれからどんどんできて、お客さんを説得できる職人になっていけば、希望はある。磨いた技能をお客さんに見せることができれば、魅力をわかってもらえる。動きはどんどん広がっていくと思う。

宮澤 ハウスメーカーの下請けをやっている大工の後輩によく話すのは「若いときは仕事が多くていいが、歳をとってきたときに技術がないと、今度は自分が、仕事早く元気のいい若い職人に取って代わられる」ということ。だから信州職人学校に行つて勉強したほうがいい、と。

いま、自社で職人を抱え、1人前になるまで育てられる会社は多くない。だが、信州職人学校に行けば、勝手に仲間と学んでくれる。会社にとっては、それも魅力ではないだろうか。

信州職人学校を出た人たちのやった仕事、大勢の人に知れ渡るようにしていくことが大事だと思う。まだ、公の場では出ればこんなことができるんだというものを示して、アピールしていきたい。